81　温故知新　堅実に考えるために

現代の思潮を知るために新聞の書評を見て参考にしようとしているが、最近、手ごたえのありそうな書物がなかなか見つからない。軽い書物が多いと感じるのは、わたしが時代遅れになったせいとばかりは言えないように思う。日本人の著作についてとくにそう感じる。日本語訳しか読めないのだけれども、欧米には日本よりも重要で自己に根ざした思考を展開する著作が多いように思う。明治以来の欧米文化輸入の習慣のせいで、日本の著作家は自分で見つけた問題を自分の思考回路で組み立てて提示する気概が足りないのだろうか。そう感じるので、翻訳物を選ぶことが多い。

これもぼんやり者の感想だからあてにならないが、1900 年代中期を過ぎると、しだいに思想の組み立てが揺らいで流動化の傾向が現われてきたように思う。五十年前にはまだあったさまざまな潮流を形づくるいくつかの思想の核が、今でははっきりした輪郭を失ってきた。これは世界的な出来事のように見える。この状況も、わたしが学ぶべき題材を見つけることを困難にしているようだ。それで、今ではあまり読まれない昔の著作をかじってみることが起きるのである。

＊

去年 V. パレートの『一般社会学提要』を勉強したのもそう

いう理由からである。そのことは「蝶の雑記帳 71」に書いたので、内容についてはそちらにゆずる。そこでやろうとしたのは、よく知られた言葉で言えば「温故知新」である。そして今回は、オーギュスト・コントの著作について同じく温故知新の試みをした。それを記憶にとどめるために、また、覚書を作っておこう。

この二冊の書物を読んだのは、M. セイモア=スミスという人の『世界を変えた 100 冊の本』に挙げてあったからだ（これは前回も白状している）。率直な言葉で書評をつづるセイモア=スミスは、パレートについて「重要性や影響力は単に社会学にとどまらない」としたのだが、コントについては、「それほど価値のある人物ではなかった」し、「社会学という言葉を編み出したほかに独創的な仕事をしていない」とするので、すぐに読むことはしなかった。しかし、マルクスや J. S.ミルなどに大きな影響を与えたというのだから、捨ておくわけにはいかない。社会学というものが模索され始めたばかりのころの著作に、現代では忘れられている大事なことが書かれているのではないかと考えた。

パレートが『一般社会学大綱』を要約した『提要』を出版したのは 1920 年のことである。コントが人間社会について考察を始めたのは 1820 年代で、もっと大きな構想の『実証哲学講義』を展開したのは 1830 年代からだという。コントの提唱した社会学という概念がおおう範囲と意味は、その百年のあいだ

に変遷しただろうことが推測できる。

読んだのは、半世紀以上も前に出版された中央公論社刊『世界の名著 36 コント・スペンサー』である。これが、コントの思想を理解するのに最もしっかりして手ごろな本と見えたからである。ただし、『世界の名著 36』には、コントの初期の著作「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」と主著『実証哲学講義』のごく一部が収録されているだけである。それでも分量はかなりのもので、その内容を詳しく議論する力はわたしにない。この思索の目的でもない。しかし、拙くても自分なりに得た全体像に触れておくことは、次の話に入っていくのに役立つだろう。

フランス革命がヨーロッパの近代への突入を誰の目にも明らかにし、ナポレオン戦争も終息したころ、若いコントの前には自国フランスの社会の動揺があった。それを看過できなかった彼は、始まって間もない近代が新しい社会組織を模索していると考えた。そして、新しい社会を築くために、啓蒙の時代以来の学問・思想を立て直す必要があると考えたのだろう。時代に押された一人の有能な青年が、哲学・思想にまで及ぶ広い関心を育んで、上の表題のような壮大なプランに取り組むことになったのだ。大それた構想である。1800 年代初期にそんな大問題に一定の成果をあげることは困難だった。20 世紀になって、パレートが範囲の限定された社会学を一般的に考察しようとしたときでも、まだ明快にさばける状態にはなかったのであ

る。セイモア=スミスの厳しい批評に対して、コントに同情できるところがある。

実際に二つの著作を読んでみると、理論的な考察に、現代でも復唱する必要のある多くの意味深い文章がある。18 世紀の古典とは書きぶりも異なり、当時としては斬新で鋭い指摘がなされたのだ、とわたしには見える。そのような新しい切り口で議論を展開した人は少なかったのではないだろうか。そうでなければ、大学のような権威のある場所でないところで行なわれた講義を聴講する人が続くことはなかっただろう。マルクスやミルが影響を受けたことをみれば、当時、その構想は一定の意味をもち、その言説にはそれに見合う内容があったと考えるべきだろう。今聞くとそれらの言説はそれほど目新しくないけれども、重要な指摘が現実に尊重されているかと反省してみれば必ずしもそうではない。だからわたしは、温故知新が必要だと思うのである。

一言つけ加えれば、フランス革命以来の社会の変遷を長期の歴史として眺めれば、コントの提起した人間社会を再組織するという課題は、いまだに未完で模索中という見方が成り立つ。

＊

ここでは、コントからパレートへと、学問あるいは科学に対する取り組み方や方法がどのように進歩したかを考えてみたい。それは、コントからパレートにつながる議論のなかで重要

な縦糸の一つで、認識を科学にまで高めるのに必要な方法に関する議論である。1800 年代初期、コントが依拠できたのは啓蒙の時代以来の教養だったが、最も進展していたのは、物理学を先頭に広がりを増してきた自然科学である。それに対比して、自然科学以外の伝統的な学問が近代にそぐわないように見えたのだろう。コントは、そういう学問全体を自然科学のように組み立てなおすべきだと考え、自然科学的な方法を導入する努力をした。そして、個体としての人間についても人間社会についても、それを扱う学は、そういう枠組みに含まれるべきだと考えたのである。

コントの文章に、方法に関連する語句を拾ってみると、重複しているが、ざっと次のようなものがあった。

* 政治を観察科学の域に引き上げなければならない
* 事実を関連づけるのは、事実自体によって示唆され確認される、全く実証的な種類の一般的観念や法則などである
* いつかは観察によって検討できるようなもの以外には仮説を立てるようなことはなく
* 構成要素全部が実証的でない限り、全体が実証的になることはあり得ない
* 事実を、いくつかの主要項目にまとめ、その関連の法則を証明すること
* 観察こそ、人間の現実的欲求に正しく合った知識、真に追求可能な知識のための唯一の基礎となり得るもの

* 決定の不可能な、いわゆる〈原因〉を追究することをやめ、そのかわりに〈法則〉、則ち観察された諸現象間の恒常的関係のみを追求する
* 事実の出現に特有のさまざまな相互関係を真に認識できるだけ
* 観察に対して、常に想像は従属しなければならない
* 論理と科学を分離しない
* 正しい考え方にいたるには、その前に観察することが必要であり、一貫した観察を効果的に行うには、まず何らかの理論が必要である

上に箇条書きした文章を見せられても、現代人はとりたてて新しいと感じないのかもしれない。しかし、それを実践することはそれほどやさしいことではない。たとえば、医療の分野でEvidence-Based Medicineが広く言われるようになったのは、半世紀前にすぎない。日本語で「科学的根拠に基づく医療」と表現されることに注意が必要である。人は根拠を挙げて話しているつもりでも、実際は、多くの事象について事実に基づく客観的な証拠を挙げることがむずかしい。自然科学に近い医療の分野でさえ、科学的な根拠をかなりとりそろえることができるようになったのは、そう昔のことではないのである。まして、一般の事象を説明するのに、確実性の高い根拠をとりそろえることはむずかしい。最近日本古代史の問題を考えて、科学的と言える根拠と論理を欠く説が多いことを改めて知った。現代で

も、多くの書物に、上の準則に照らせば疑問符をつけざるをえない主張があるのだと思う。

上の準則は現象の説明に確実性を与えるために現代でも欠かせないということを強調する必要があるのだ。もちろん昔から、そういう流儀で考察を進めることの多かった人が、堅固な業績を挙げてきたのである。しかし、そういう人でもその方法が徹底しないことがあり、他方に、そういう考え方を心がけない論者が多かった。自然科学が発展すると、確実な根拠を欠く言説は、負の意味をこめて形而上学と呼ばれるようになった。そうして、自然科学的な方法を適用することが重要になったのである。そういうことが始まったばかりの時代に、コントは、政治のような社会学でも自然科学的な方法で考えることの重要さを訴え、上のような文章を紡いで、広い分野に対応する科学的な方法の明文化という大事な仕事に寄与したのである。

コントの準則には、のちの科学方法論で用いられる重要なキィーワードが含まれている。それらを抜き出しながら、1900 年代初期に考えられた科学的な方法を整理してみよう。

「観察」と「実証」が芯になる概念である。観察は、「想像に依拠せず」、「事実」に対してなされなければならない。そうすれば、「追求可能」で「決定の可能」な「事実」が得られる。観察できる諸事実は実証的と言え、それらを根拠に「理論」を構成できる。そのとき、理論を構成する「構成要素全部が実証的」と言える。理論の構成要素は複数で、理論とは「その関

連づけ」のことである。その関係も「追求可能」で「決定可能」でなければ、理論の主張することが「実証的」に確実なものにならない。だから、「理論が必要」だし、また、「科学と論理は不可分」なのである。

さらに補足しよう。学問が目指すべきなのは「観察科学の域」で、「実証的な種類の一般的観念や法則」を得ることである。その註釈の文が、「観察こそ、追求可能な知識のための基礎となる」、「観察に対して、常に想像は従属しなければならない」、「決定の不可能な、いわゆる〈原因〉を追究することをやめる」といった文だ。理論の構成の仕方についても、「事実を、いくつかの主要項目にまとめ」、それから、「その関連の法則を証明すること」と、事象の複雑さを整理して結論を導くための有用な指針が与えられている。

「科学」の探求プロセスは、フィードバックを含むこれらの複合的な方法・“手続き”を反復循環させることによって進む。その反復循環を開始するには、出発点となる「仮説」が必要だが、そのことを、「一貫した観察を効果的に行うには、まず何らかの理論が必要である」という文が指摘している。そして、「観察によって検討できるようなもの以外には仮説を立てるようなことはなく」なって、「いつかは正しい考え方にいたる」のを目指すのである。

もう一つ大事なことは、科学に対して、以前の形而上学のように「第一原理」を求めることを戒めている点だ。コントは、それを、「そのかわりに〈法則〉、則ち観察された諸現象間の

恒常的関係のみを追求する」のだと言っている。科学は、「事実の出現に特有のさまざまな相互関係を認識できるだけ」なのである。

言葉を足して以上のように整理すると、コントは、科学とその方法についての現代の認識をかなり把握していた、と見なすことができる。百年経った 1900 年代初期、パレートは、科学を、その基本的な特徴を要約して「論理的実験的(経験的)科学」と表現した。「論理的」また「経験的」という言葉には、上に整理したような科学的探究の諸特徴がこめられているのである。そして、パレートは、科学の「論理的」また「経験的」方法を、学的研究がまだほとんど行なわれていなかった一般社会学の領域に適用して、探求したのである。それについては「蝶の雑記帳 71」に記したので、ここでは省略しよう。

＊

目的はおおよそ果たしたけれども、考えたことをもっと広い視野で眺めておこう。わたしが巡り歩くことがらがわたしの関心事なのだが、そこには、人間はそれをどのように知ることができ、言いとることができるか、という問いがある。その問いを、唯物論的に解釈したカントの認識論を出発点に、「蝶の雑記帳 49　園丁と蝶の対話 その一」以来たどたどしく考えきた。今回の科学と方法についての思索も認識論に含まれるべきものである。わたしのかじった少数の画期的な仕事をたどると、

現代では、上で考えた準則に追加すべき科学の要件として、ポパーの「反証可能性」がある。もう一つは、もっと一般的に重要なことで、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』が明らかにした「論理体系」の限界である。科学の論理体系は自己矛盾を含まないという以上に、〈原因〉たる基礎をもたない、と考えなければならない。それは、数学で、ゲーデルの「不完全性定理」として証明されている。そして、歴史を顧みれば、クーンの提出したパラダイムという言葉で知られているように、実際の科学研究が必ずしも理詰めに進展しないことが明らかになっている。それは、科学研究の営みが限界をもつ人間社会で行なわれるからである。

科学論は哲学の分野に含められて考察されてきた。科学的な認識がどのように進んだかを考察したカッシーラーの『認識問題』を読んだことがあるが、そこにはクーンの論に当たることが書かれている（カッシーラーの仕事はパレートよりも前 20 世紀初頭で、クーンの仕事は 20 世紀後半である）。人間の認識は自然科学の分野に属す神経回路網の働きとしてあるから、現在では、科学的な認識の問題も自然科学と無縁ではなくなった。わたしの理解では、神経回路網による認識は諸要素の関係を変換していくことで進むようだ。それは、論理の組み立ては写像によって進むとするウィトゲンシュタインの考え方に通じている、とわたしは思う。

締めくくろうとしているうちに、以前の「蝶の雑記帳」に記

してきたことのくりかえしになって、話にしまりがなくなってきた。まだわたしの知らない大事な論点があるだろうが、今回の考察はこの辺でおしまいにしよう。

2019 年 4 月 27 日